

ドイツ・ロマン派における「悪」の概念の系譜

— パラケルスス、ベーメ、シェリング より —

能 木 敬 次

序

キリスト教世界が「悪」について語りはじめたのはいつからなのだろうか。アダムとイヴを罪へと誘った悪魔の仕業は聖書を開けばすぐに目に入る。しかし、「悪」というものの本質についてギリシア的世界知から哲学的考察を加えたのは、かなり後になってから、つまり14・5世紀のルネッサンス期である。この時期、東ローマ帝国が崩壊して（1453）多くの哲学者や博識な聖職者がイタリア諸都市へ逃れてきた。そういった状況をふまえてメディチ家の保護を受けたフィチーノが開設した「プラトン・アカデミー」でプラトンとその周辺の神秘主義的思想の研究が本格的に行われ始めた。その成果として、プラトンの思想を直接ギリシア語から遺漏なくヨーロッパ世界へ紹介・伝承することが可能となった。その中で、聖書以前の世界に存在した「悪しき創造神デミウルゴス（*demiurgos*）」の姿が再び浮き彫りにされた。

しかし、この成果はそのまますぐにキリスト教世界で共有されることはなかった。北欧ルネッサンス運動も、またそれよりもいっそう激しい思想運動であった宗教革命も、エラスムス、トーマス・モアの例を除いては、われわれの目にはなぜか15世紀、イタリア諸都市で華やかに開花したルネッサンス思想を受容するには至らなかったように思われる。

もっともデミウルゴス、この背後に真の神をいただく二次的な神の存在は、キリスト教会の創成期にあたる紀元3・4世紀にプロティノスをはじめとす

る新プラトン主義者や、キリスト教の教義に依拠したグノーシス諸派によって独自の教義形成のための要素の一つに組み入れられていた。しかし、ローマ帝国がキリスト教を国教とするやいなや（ミラノ勅令、313年）、彼らの思想はすぐさま異端とされ、文献のほとんどが発禁や廃棄処分とされた。「悪神デミウルゴス」はそれらとともに歴史の表舞台から姿を消してしまった。それ以来、世界創造と人間本質に関わる「悪」の思想は、リリト伝説とともにユダヤ教の教義解釈書（タルムード）の中でわずかに姿をとどめ、いわゆる地下水脈の中で細々とその命脈を保ってきた。

それから時代が中世から近世・近代へと移り変わろうとする時、この間、1000年以上の歳月が流れるが、われわれが驚嘆すべきことは1000年以上もの間、西洋と東洋の様々な歴史的転換となった事件・事変の中、キリスト教会はアヴィミヨン戦争などを経つつも、異端思想をほぼ完全に封殺し続けてきた、またそれが可能であったということである。それから、ルネッサンス期における人文主義とその直接的な影響下にある宗教改革期の社会的・思想的激震とともに現れたキリスト教敬虔主義・神秘主義による思想的鍛錬を経て、この危険思想は幾人かの異端者の思想を借りながらより明るい光の中へと立ち昇ろうとする。J. ブルーノ（1548-1600）、カンパネラ（1568-1639）及びルターの思想的先駆者であるウイクリフ（1320-84）、フス（1369-1415）、人文主義者のエラスムス、そしてルターの思想的後裔であるメランヒトン（1497-1560）やゼバスティアン・フランク（1499-1542）、V. ヴァイゲル（1533-88） — 彼らの思想は伝統的なキリスト教教義からの離反の歴史でもある。中でも J. ベーメ（1575-1624）、T.H. パラケルスス（1493-1541）、そして時代はずっと下ってゆくが、シェリング（1775-1854）の善と悪に関する思索と思想は伝統的なキリスト教教義を完全に逸脱していると言える。本論文はヨーロッパにおいて常に思想の裏面史を歩み続けてきたこの変種のプラトン主義思想にほの暗い姿に光を当て、そこに現れた奇妙な形姿を白日の下に晒し出すことにある。

1. 三者の思想の共通性と独自性

なぜ今、ここでパラケルスス、ベーメ、シュリングについて語らねばならないのか。その答えは三者の思想に共通した異端性にある。ある者は父親の職業を受け継ぎ、一定の社会的地位にありながらもその奇矯な風貌、またその地位に相応しからぬ傲慢な言行ゆえにいたるところで忌避され、生涯、放浪の旅を余儀なくされた。またある者は一見、理解不能な語り口調とその「現世離れ」した思想と術語によって、それを公けにすることを禁じられた。最後の人物、シュリングは大学の講壇で古代ユダヤ的・ベーメ的思想の改編・発展である「同一哲学」を開陳し、多くの聴衆を集めた。しかし、その栄華は一睡の夢となり、十数年後、彼の斬新な哲学はその極端な観念性と科学的な根拠の欠如ゆえに哲学界の軽蔑と憐れみの眼差しを集めて講壇を去った。しかし、そういった不運な彼らの生涯と思想は、時代に即した特徴を鮮明な形で持っている。つまり、パラケルススは経験的科学主義の観点から、ベーメは古代ユダヤ的、もしくはマニ教的観点から、シュリングはカント以来のドイツ観念論の土壌の上でのロマン主義に立脚した、古代ユダヤ的、反科学主義的観点から「悪」の問題を捉え、独自の表現形式をもって言及している。パラケルスス・ベーメ・シュリングの時代はウィクリフ・フス以来の革新的思想運動と民族主義的革命によって人々のカトリック信仰への信頼が揺らぎ、革命的プロテスタント思想及び合理的科学思想が世界思想の全面に押し出してくる時代ではあったが、個人としての人間の行為の特性に関する洞察、つまり人間行為の善悪の問題についてあらためて正面から問い直す試みは、未だ思想界には現れていない。時代はまだ教皇とその配下にある者たちの腐敗への糾弾とその背後にある隠れた意図、つまり国王権の伸張とその絶対化をその主たる歴史的課題としていた。しかし、ドイツでは事情はいささか異なっていた。その地域の後進性からか、民族的特性としての非政治性・観念愛好性からか、ドイツには人間精神の特性探究を純粹に追い求める気質が優勢であった。イタリアでのルネサンス運動以前も以後も、ドイツでは粗

野な農民や職人が、都会生活にすれていない田舎者が、ラテン語はおろか今日の意味で適正なドイツ語表現もできない一般下層階級が、その中でも神と人間存在に関する素朴な関心を抱いた者が散見されたのではないか。宗教改革後の農民戦争の混乱期、知識人も高等な学校教育を受けていない者にも敬虔主義的な思想家・活動家がドイツに多く輩出しているのも、そういったドイツの事情を強く予感させる。ここではそういった人物たちの中でもパラケルススとベーメ、シェリングの思想について扱われる。彼らは意識的にも、また意識下のレヴェルにおいても経験的・科学的な知見に立ち、また古代ユダヤの思想をヒントにして善と悪の思想を科学的知見と融合しようとした。彼らの思想の中には旧来のカトリック的因習と反カトリックに拘泥したプロテスタントの半ば硬直した思想・宗教態度を打破する強力な爆薬がある。さらにその爆薬も彼らの時代・思想の中ではそれぞれの特徴と独自な色彩を見せている。

2. パラケルススにおける「悪」の思想の展開

パラケルススは南ドイツの貧しい家に生まれ育ちながらも父親に倣って医学を修めた。成長して諸国を遍歴しながら見聞を広め、一時はバーゼル大学の教壇にも立ったこともある。彼は知識人の言語であるラテン語を自由に使いこなせなかったけれども、放浪の旅の中で得た民間治療の知識を原資として各所で名医としての評判を得ていた。医者であり、かつ学究的な世界にも籍を置いたことがあるのにも拘わらず、農民をはじめとする在野の人々の生活を好んだパラケルススの世界観は、知識人の上流意識からも、また庶民の迷信的態度からも解き放たれていた。彼の思想はルネッサンス期の知識人の知的高揚にあって、近代経験主義と中世錬金術の術語世界を織り交ぜた奇妙な世界観を形成していた。彼の立ち位置は一言で言えば、フランシス・ベーコン（1561-1626）と同じく経験主義的科学者であった。しかし、彼の思想を表す言葉は中世錬金術師とカバラのそれであった。彼は自ら生み出した錬

金術的術語をもって神とその世界創造を説明する。

(神は) 永遠の霊であると同時に永遠の中心である。それは *Misterium Magunum* (大いなる神秘) であり、これは世界へと自己展開し、自己外化し、自己拡張してゆく²⁾。

Misterium Magunum は中世以来、使い古された術後であるが、パラケルススはこれを自己の哲学思想の中で「自然・宇宙を形成する核・原動力」として再び取り上げる。*Misterium Magunum* から最初の生命を帯びた *Yliaster* (イリアステル、もしくは *Yliader*) が出現する。これも「宇宙を形成する素材」を意味するパラケルススの造語である。この *Yliaster* から硫黄 (*Sulpher*)、水銀 (*Merkurium*)、塩 (*Sal*) の三原質が構成され、それらは相互に合一・分離・濃縮・凝固の段階を経て³⁾、アリストテレスの自然学以来の慣わしである四元素 (地、水、風、火) へと分化する。それらはその母体である三原質とともに多様な外界の具体物の中に受肉して物質を生じ、さらには金属を生じ、人間をも生じる⁴⁾。

ここまでがパラケルススが先哲より継承した宇宙創世観であるが、これ以降、彼独特な世界観が展開される。彼は、

(世界に「悪しきもの」が存在するのは) タルクロスの (*tartarish*)、カガストルムの (*cagastriſch*) 物質の腐敗や天体の悪しき影響 (流入) によるものである⁵⁾。(イタリック操作は筆者、以下、同じ)

物質はその全体がすでに腐敗しているカガストルムである。これが生命が物質を支配しきれず、部分的には物質中に入り込めない理由である⁶⁾。

墮落が存在するのは、分離、すなわち諸々の存在や個別のエゴイズム (自我のあり様) においてである⁷⁾。

魂は魔術的な力であると同時に一つの思想であり、力の中心であると同時に意識の中心である⁸⁾。

科学者パラケルススにとって「悪」もしくは「悪しきもの」とは宇宙的・物質的な特質そのものである。宇宙に偏在する「霊」は物質の中に自己を透入しようとする。それが「受肉」の行為なのであるが、物質の方も受肉として自らを「霊」へ捧げることが拒否することがある。これが「胚種」(Gerum)の展開たる「生命」が自己自身の内で抵抗に出会い戦わなければならない理由である。それゆえ、病気とは霊と物質の間における生命の対自的戦いにほかならない。それゆえまた、地獄(「悪」の在り処)は世界の中心の外にあるのではなく、人間の住むいたる処の中心にある。ここにおいて彼の思想は敬虔主義者ヴァイゲルのそれに近づく。(ヴァイゲルはパラケルススよりも40年ほど遅れて世界に登場したカバラの知識に長けた思想家であるが、天国や地獄は地上とは別の場所にあるのではなく、人の内にある、と考えた。)パラケルススはまた病気を実体的に、もしくは一つの実体として捉えている。

病気とは、その大半は生命の二つの流れの間の争いに他ならない。病気もそれ自身としては一個の存在、実在、生命なのである。一種の寄生的生命(である。)⁹⁾

病気とは罹っているものの存在の生命を犠牲にして生長する生命であり、したがって寄生された方にとっては悪である¹⁰⁾。

病人のアルケウス(Alceus、始源者)は、この寄生的生命と戦う病気にとって敵対者であり、医者はこの戦いに助太刀する。この争いとそこから生じる混乱、またその前提をなす不調和、これが悪なのである¹¹⁾。

実践的医師パラケルススにとって、物事の善悪の問題は、生命体の主体的選択、つまり、善－健康、悪－病気といった生命体の側の二者択一的存在形式の問題なのである。勿論、それを単に物質的に、唯物的に理解することは出来ない。自然科学者としての彼は善悪を生理的・実体的に捉えている。同時にまた哲学者としての彼は善悪を思想的軌道の中で捉えている。つまり、パラケルススは宇宙と人間を極大と極小の関係で対称化する。宇宙は、物質的な宇宙・天体宇宙と前二者にそれぞれ対応する神の諸部分が人間において、人間の身体（corpus）、魂（ratio）、霊もしくは精神（mens）に対応する。パラケルススにおいてその思想の大原則は、宇宙の霊と物質が人間の善（健康）と悪（病気）といった二項対立の中で世界の事象・事物の全てが展開することにある。よってパラケルススにとって悪とはあくまで善なる天界に対する人間界の問題、物質・精神の両面で腐敗、墮落し、その存在の様相において不均衡、不調和の状態にある人間の現状を指す。その視点は常に科学的・実証的なものである。

3. J. ベーメにおける展開

靴職人であったベーメは生涯で二度の時期に亘って神秘体験をしたと言われる（幼年期にたびたび、結婚後に一度）。それは恐らく昼間の幻夢体験か夢の中で見た啓示的物語であろうが、その体験をもとに彼はパラケルススや他の知識人たちから得た術語と彼独自の直截な用語法を用いて神的世界の本質と善悪の起源を語った。彼がその思想をどこから与ったのかは今でも正確には定かではない。その錬金術的用語法からベーメはパラケルススのパンフレットを手にしていたのは確認されているが、またそれをどこまで彼が理解していたかは定かではない。しかし、当地ゲルリッツの牧師が彼の思想を厳しく指弾し、長年、闇の中へ押さえ込んでいなかったならば、彼は旧来の因習的な腐敗した教会のあり方を否定し、新たに神との直接的な結合を訴えるプロテスタントの地で宗教裁判にかけられ、処刑され、この世からいち早く葬り去られていたことは確かであろう。

ペーメは A. マグヌス (c. 1200-80) や N. クザーヌス (1401-64) らによって培われてきたヨーロッパ神秘主義の伝統をいっきにゾロアスター教・マニ教的レヴェルへと引き戻した。ゾロアスター教の教義では、神の永遠の劫火の中で善神アフラマズダと悪神アーリマンの闘争がくりひろげられ、その過程の中で世界とその歴史が創造される。ペーメの思想の展開される場は常に「神の炎」である。

世界の生誕は悪と善の苦悩する不安の中、墮落と解放との中にあって、最終の善悪の行為の足し引き、即ち最後の審判の日まで続くのである¹²⁾。

…永遠なる自然の神秘のうちにそこからすべての善と悪の被造物が生み出され、創られる¹³⁾、

悪もまた魔術的な欲動によってたえず神秘のうちに自らを求めて見出し、そしてともに開示された¹⁴⁾、

善悪の混じり合った生命から神のうちに、かつ神から生まれる者は誰も「自由」である。(「 」は筆者の補足)¹⁵⁾

(神は) 光の世界と死の世界という二つの原理のうちで、両者の渴望において「地球」を生み出した¹⁶⁾。

憤怒の運動のなかで達成されたものは、あわせて地球へと創造された。それゆえ地球のうちには、悪と善が多様な仕方で見出される¹⁷⁾。

神の永遠の火の中に光と闇(死)の世界が自然の根源として拮がり、そこから善と悪が世界の具体像・被造物として展開し、地球の歴史を開いてゆく。
… これはゾロアスター的・マニ教的宇宙論の表象である。

悪魔たちははじめは光の世界へと創造された。… 火は悪魔たちの真正な生命であり、彼らは多くの特性に従っているにせよ、自然の中心から同じ本性に従っているからである¹⁸⁾。

ところが、

アダムは、悪と善を食べ、外的なものを中央へと導き入れてしまった¹⁹⁾。

闇の世界において悲痛であるものは、光の世界では慈意である²⁰⁾。

闇の世界は光の根底（Grund）であり、根源態（Grund）である²¹⁾。

光は意志を捕え、その意志も光を捕える。そこではまた悪しき意志は光に委ねられ、光は自分の力を邪悪に与えて邪悪から親愛な善き意志を造る²²⁾。

闇の世界は自然の根底であり、そして父と呼ばれる永遠の無底的な意志が闇の世界の根底であることは先に述べた通りである。また光の世界は闇の世界のうちに隠れており、闇の世界も光の世界に隠れているのである²³⁾。

この世界において認識できるように、自然のうちにあるすべてのものは闇であり、不安のうちにある²⁴⁾。

われわれは自己のうちに、神的なものと悪魔的なものという二つの神秘を二つの永遠の世界と外的世界からもっている。… われわれが自己を善へ導けば、神の霊がわれわれを助ける。しかし、われわれが自己を悪へ導くならば、神の憤怒と怒りがわれわれの手助けをする。われわれが欲するもののその特性に、われわれは導き手を獲得し、そしてその特性のなかへ導かれる。とは言え、われわれが破滅するのは神の意志ではなく、神の怒りによるのであり、そしてわれわれ自身の意志なのである²⁵⁾。

ここにおいて個人はパラケルススと同様にその善悪の存在規定において、自己の主体性を認められている。つまり、自己の中にある神の炎、それは神の欲動（Begierde）であるが、それは同時に個人の魂を形成する要素でもある。その欲動に個我が「善」として主体的に関与する時、彼の行為は「良きもの」として現実世界で発現し、また逆に個我が欲動に主体的に関与することを逸した時、それは「良きものでないもの」、言いかえれば悪として発現する。勿論、この主体性の思想はカトリック、プロテスタント双方においても異端である。ベーメは、自己の神秘体験を通して

- 古代ユダヤ教の教義及びカバラの思想における「憤怒と愛」のモチーフに象徴される善と悪の同体思想を継承した。
- ゴロアスター・マニ教における「創造する炎」のモチーフを融合して新たな神との直接的接触を図る思想を生み出した。

以上のように、ベーメの思想にはゴロアスター・マニ教的要素とカバラの思想に加え、さらに錬金術の術語を交え、いっそう混沌の様相を示して晦渋な文体となっている。彼が示す神による世界創造の工程はカバラの創造段階説を借用しているが、そこにはベーメ独自の工夫がなされている。カバラにおける神の顕現の段階はホクマー（象徴的意味＝智慧）、ビナー（理解）、ヘセド（慈悲）、ゲヴラー（公正）、ティフェレット（美）など九の段階の過程を経てゆくが、ベーメは彼独自の七つの段階を提示している（第一の性質 [欲望]、第二の性質 [流動性]、第三の性質 [不安]、第四の性質 [熱、火]、第五の性質 [光]、第六の性質 [響き、音、言葉]、第七の性質 [形]）。これらの象徴的比喩の意味は晦渋であるが、その中で、ベーメは第一性質と第二性質に「悪」（ルシファー）が潜在していると言う。可視的自然の創造以前に創造された天使の世界に「悪」（ルシファー）があるとし、彼ら天使の怒りの暗い光を明るい愛の炎に変えること、怒りを愛に従わせることが「善」であるとされた。このようにベーメの世界創造説組み入れられた善悪論は、ゴロ

アスター・マニ教的、及び古代ユダヤの神話世界から紡ぎ出されたカバラの善悪の形而上学である。それはルターより始められた権威化し、腐敗し、硬直したカトリックに対するプロテスタント運動に触発されて生まれた新思想の一つであったが、あまりに古代の匂いを漂わせた異教的な思想であったために、また一見、幼稚な文体による錬金術的な思想ゆえ、時代にそぐわず、一部の支持者への影響を残して200年以上世界から閑却されてしまった。

4. シェリングにおける展開

ギリシア・ローマの知識の再獲得と理性的世界把握の目覚めといったイタリア・ルネッサンスの成果を踏まえ、近代の合理的・経験主義の先駆者となったパラケルスス——中世のキリスト教カトリック世界から全面的に乖離し、プロテスタント時代の革命と清新な思想的息吹に触発されながらもその時代の思想から全く孤立してゾロアスター・マニ教的教説を素朴な術語で展開したパーメ——その後に来るのは、弱冠23歳でイエーナ大学助教授就任、27歳でヴェルツブルグ大学の教授に招聘され、ロマン主義哲学の旗手として19世紀初頭のドイツ哲学界で一世を風靡したシェリングである。彼はカントが確立した批判的・(当時としての)科学的・分析的観念論の伝統に則ってスピノザ・ライプニッツの实在論を排し、「悪」の独立性の議論を観念論の立場から展開した。カントは「純粹理性批判」の中でルネッサンス以来の懸案である「自由」と「善」の問題を新たな科学的・分析的哲学で取り扱った。つまり、カントはまずイギリス経験論の成果をふまえて事物の本質的存在を不可知なものとした。それによって实在の客観的認識は不可能となったわけだが、そこで彼は経験論が主張する、このような主観の側の能力の否定性を逆手にとって、(人間が色メガネをかけて周辺世界を見るように)主観が客観世界を解釈的に把握するとして世界認識における主観の主導的役割を提唱した。そのようにしてカントは(現在、我々がそう呼ぶところの)ドイツ観念論の領域で世界把握の手法を批判的に(kritisch)詳細に論究・論述した。

当時、カントが築き上げたピラミッドのような巨大な成果を前に、自己の存在意義を見出すのに呻吟したのは哲学研究者だけでなかった。文学者や詩人も、いや芸術家や知識人すべてが世界と自己存在の根底に対して言いようのない不安をおぼえた。詩人のH.クライストや運命悲劇の作家たちは、素直にその不安な、自己存在の根底を失ったかのような思いを作品のなかに表出した。その時、彼らの幾人かが着目したのはベーメの思想であり、ベーメの思想を再発見した医者で宗教学者であるX.バアダー（1765-1841）であった。その影響関係の構図は未だ詳らかにはされてないが、フィヒテとヘーゲルはベーメから哲学体系展開の方法としての彼ら独自の発展的「弁証法」を、シェリングは宇宙世界の本質の「未分化の同一性」という哲学の根源的土壌をバアダーを介して汲み取ったのである。新たな武器を得たシェリングは、カントの「自由」の問題に対して「運命的必然性」を、「善」の問題に対しては「悪」を提示し、彼独自の「同一哲学」を観念論の土壌で展開した。（もっぱら、カントはシェリングの哲学に対してはさして反応を示さなかったようであるが。）彼は（世界の創造者であり支配者、かつ人間の認識能力の付与者であり、同時に認識行為の目的である）神の行為の特性としての「善」は本来「悪」と同一のものであり、また神による世界表象の支配下にある「人間の自由意志」の「善」としての特性は同時に「悪」として規定することも出来得るとした。シェリングは『人間自由の本質およびそれと関連する諸対象についての哲学的研究』（1809）において「悪」の問題をスピノザ・ライプニッツ批判を通して導出している。

ここで言うておかなければならないことは、シェリングの場合、議論の前提はJ.カントの『実践理性批判』における道徳論・人間自由論にあることである。カント哲学において人間自由論と善の問題が、定言的命法（「汝、為せ」）に示されるように（カント自身は決して言うてはいないけれども）、人間の行為は神の手から離れて純粋に倫理的な、ただ人間の側だけの問題として扱われている。彼は積極的に悪について言及しているわけではない。道徳論のなかでカントは「最高善」という術語を頻繁に使っている。この言葉

は伝統的に宗教的な意味を付与されてきたが、カントの意図はそうではない。カントにおいて「最高善」とは人間の最高に純粋な意志より発した積極的な行為、つまり「道徳性」が人間の幸福と統一的に完成された時に現出するのである。

これは純粋な実践理性全体を対象としている。そこでの支配的な規範として「道徳法則」が人間の行為を規定している。つまり、人間の行為の道徳性の問題の中で、定言的命法による自己に対する無条件な命令が自己の自由意志から出たもの、自律的なものであればそれは「善意志」となる。反対に何がしかの見返りを求める条件的なもの、つまり、仮言命法（「もし…であれば…しなければならぬ」）であれば、それは「善意志」とは言わない。つまり、悪とは言わないまでも（実際、カントはそのような叙述は一切していない）、論理上、「非善」となる。このように、カントは人間の自由意志にかかわる倫理上の問題として善悪の問題を論じた。これは、世界把握の問題、認識論の問題においてJ. ロック（1631-1704）、バークレー（1685-1753）、ヒューム（1711-76）などが展開したイギリス経験論に組しながらも、実践行為の問題、倫理の問題においてイギリス経験論の議論を発展的に展開しようとしてカントがプロテスタント的な心情から編み出した倫理学であった²⁶⁾。純粋理性の問題において主観の側の支配的な役割を強く要請し、また、実践理性においても「個人意志」の役割を絶対条件とした点において、カントはSubjekt（主体、主観）の役割に首尾一貫した論理を示し、それは当時としては人々に世界と人間との関係についてほぼ完全な理論のように思われた。もっとも主観に発する世界認識の確実性や実践理性における自由な「個人意志」を行使する際の前提としての純粋理性によって把握された世界の確実性と明証性が後にまた議論に付されることとなるが。前述したように、カント以降の思想家はこのあまりにも完全に見える偉大なカント哲学に対してなんとかして一矢報いたい、突破口を明けたいともがき、新たな思想展開に苦慮した、というのが実情であろう。シェリングもその延長上にある。

シェリングはカントの例に倣ってスピノザ批判から始める。それはカント

の批判哲学を明確に意識していることの左証である。かれは、スピノザの幾何学的な論理構造を持った体系には「生命の無さ、形式の無情さ、諸概念や諸表現の貧弱さ、諸規定の仮借ない手厳しさが出てくる。こうした厳しきは抽象的な考察様式と申し分なく調和している」²⁷⁾と厳しく批判した後、持論へと入ってゆく。

神は悪を創り出した共同の首謀者として思われるのは否定できない²⁸⁾。

人間意志の中で精神的となった自我性が、光から分離してゆくということが起こるのであって、つまり、神のうちでは分かち難く結びあっていた（善と悪という）二原理の分解が起こるのである。… まさにこのような我意の高まりが悪なのである²⁹⁾。

悪とは、諸原理の積極的な転倒もしくは逆転にもとづくものなのだ。
(F. バアダーからの引用)³⁰⁾

悪が、否定すべくもなく、すくなくとも普遍的な対立者として、現実的である以上は、たしかに、神の啓示にとって必要なものであったことは、まずもって最初から疑いえないことである³¹⁾。

善の決定的な出現とともに、悪もまた全く決定的に、そして悪として、出現するようになる³²⁾。

悪に向かおうとする人間の自然的傾向は … 明白であるように思われる。なぜなら、ひとたび我意の覚醒によって被造物のうちに登場したところの諸力の無秩序は、すでに誕生のさいに、人間に分有されているからである³³⁾。

シェリングはカントの道徳哲学を議論の叩き台として、自由の問題から入ってゆく。カントは、自由の問題を神の側の問題ではなく、あくまで人間の問題として展開している。そこでは純粹意志に由来するその定言命法（「汝、為せ」）がなんの見返りも要求しない無私な意志と合致し、それが行為となった時こそ人間の絶対的自由と善が現出する。それに対してシェリングはベーメの世界観の立場から善と「善でないもの」、つまり悪の根拠と本質的問題を展開する。善と悪は神の領域にあって非分離な同一存在として現出する（引用30、31）。そこに神の側の、神における自由がある。神は善を創出するがゆえに、悪をも創出するのである。そういった段階を経て彼の論の中心は、行為における人間の側の問題へと移る。つまり、神の許にあって不可分の状態にある存在と行為の元型としての神の炎から、人間が善を選ぶか、もしくは悪を選ぶか、その選択権は人間自身の手委ねられるのである。それが人間の自由に関する本質的問題だとシェリングは考えている。シェリングは神と人間の双方に対して、善悪の提示の仕方、取捨選択の自由を認めたのである。これが、シェリングがベーメの哲学から読み取り、紡ぎ出した成果、つまり同一哲学である。

結 び

パラケルススとベーメは同じルネッサンス期に活動しながらも、またベーメはその術語の使用においてパラケルススに恩恵を受けているが、彼らの思想は根本的な違いを示している。パラケルススは真の意味でルネッサンスの申し子であった。当時、ガレノスの解剖学やアリストテレスの自然哲学は1000年以上にも亘って医学界・大学の権威とされてきたが、パラケルススはそれを真っ向から否定してバーゼル大学や諸都市の医師協会から排斥され続けた。経験主義と科学的実証主義を切り開いたこれほどの急進的な思想家・実践家は当時、彼をおいて他にはいなかっただろう。晩年のパラケルススが示した錬金術的な世界観も、当時の時代的、思想的事情から見て何の矛盾も

ない。中世以来、ルネッサンスが新たに再発見したのは、アリストテレスの論理学だけではない。プラトンやピタゴラスの著作の翻訳・研究も行われた（フィチーノ、ピーコ、ポンポナツィ）。その中でも錬金術の思想は純粹に数学的世界観とは対立的な軌軸を示しながらも、ルネッサンスが発見した同じ新たな世界把握の手法の一つであった。白魔術としての錬金術はルネッサンス期の科学的世界把握の手法の一つであった。現代でも、いや現代でこそ真に世界の有り様、本質を探究し、真に科学的・実証的探究方法を探る者なら、その単純な分子・原子レベルでの物的理解が世界の本質理解として不十分であることを知っているように、ルネッサンス期の知識人には世界把握における靈的な、神秘主義的なアプローチが最善の、真に有効な方法の一つと思われていた。それは、当時、ボローニアやサレルノで開講されていた正規の講座の中に占星術・錬金術が含まれていたことによって頷ける。

しかし、北ドイツのプロテスタント派の小さな街で生まれ育ったベーメの思想的環境はパラケルススのものとは全く異なる。彼らの生まれ育った環境・教育・知的経歴の違いがそのまま、彼らの善悪論について対照的な思想となって現れている。加うるにベーメの神秘体験である。ベーメはパラケルススの著書を読んだ形跡はある。しかしパラケルススの用いた錬金術の術語は利用したものの、パラケルススの思想はほとんど受け継いではない。前述のように、ベーメの思想は、ゾロアスター・マニ教のカバラ神学から汲み出された神秘主義的形而上学であった。それは当時であってもあまりに異色なもの、奇妙なもの、いかがわしいものであった。そして、その異色さ、東洋的色彩、独創性ゆえに、19世紀のナポレオンによるヨーロッパ変革後に要請された新思想の源泉としてドイツ・ロマン派の思想家たちに汲み上げられたのである。

そしてシェリングは、このベーメによる「神における善悪同根論」をカント哲学の土壌で展開させ、「主観と客観の絶対的な同一」といった理論的な軌軸の下で、世界本質の根源態における「主体と客体の無差別的同一性」、「善と悪の始原的同一性」を説いた。彼の哲学はカントの批判哲学を超克し

ようという強い意志のもとに用意されたものであるが、その論点・切り口はカントのものとは全く異なるものであったため、またシェリングが講壇で活躍するのはカントの最晩年という事情もあり、直接、互いに議論を戦わせることはなかった。また、彼の同一哲学が後の世代に継承されることはなかった。しかし、シェリングの同一哲学は、ヘーゲルの歴史哲学における弁証法的・発展的論理構造の展開に一定のヒントを与えたのは彼の功績としなければならぬ。

注

- 1) プラトンの『ティマイオス』に記述されている世界創造神。
- 2) これは「カバラ」にある創世説話の焼き直しである。
- 3) 錬金術の工程を指す。
- 4) 術語はパラケルスス独自のものであるが、思想的にはこれといって特異なものではなく、アリストテレス自然学と錬金術の融合である。
- 5) Tartar とは酒石、かす、残渣、結石、硬化症を意味する。Cagastrium とはイリアステルの墮落したもの、逸脱、腐敗、硝石の塩を意味する。どちらもパラケルススの造語である。
- 6) アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』153 頁
- 7) 同上
- 8) コイレ 123 頁
- 9) コイレ 152 頁 人間をはじめ、生物全般を指す。
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) Böhme: *Werke* S.114.
- 13) 『ベーム小論集』15 頁
- 14) 同上
- 15) 同 26 頁
- 16) 同 48 頁
- 17) 同上
- 18) 同 55 頁
- 19) 同上
- 20) 同 61 頁
- 21) 同 62 頁
- 22) 同 81 頁

- 23) 同 83 頁
- 24) 同 93 頁
- 25) 同 111 頁
- 26) イギリス経験論において、道徳の問題は A. スミス の思想に代表されるように人間の利己主義的心情の延長として捉える傾向がある。つまり、人間の道徳心は利己主義・自愛主義から導出され、「見えざる神の手」に導かれ利他主義・道徳心へと昇華してゆくものと考えられている。また、ロックは「道徳的知識は数学的知識と同じく真実であり、論証可能である」としているが、その根拠と実践的な適応については詳細な説明をしてはいない。知識・真理の確実性・絶対的真実にのみ力点を置いているのは時代的な制約からくるのかもしれない。ヒュームは快・不快の感情を起点に功利主義的な観点から道徳の問題を考えている。
- 27) Schelling : *Über das Wesen der menschlichen Freiheit* S.60. (以下、Schelling とのみ表記する)
- 28) Schelling S.65.
- 29) Schelling S.78, 79.
- 30) Schelling S.80.
- 31) Schelling S.88.
- 32) Schelling S.96.
- 33) Schelling S.97.

参考文献

Jacob Böhme : *Werke*. Hergs. von Ferdinand van Ingen, Deutscher Klassiker Verlag im Taschenbuch Band 33. Frankfurt am Main 1997.

Paracelsus : *Werke* besorgt von Will-Erich Peukert. Schwabe Verlag Basel 2010.

F.W.J.Schelling : *Ausgewählte Schriften*. Suhrkamp buch wissenschaft. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1985.

F.W.J.Schelling : *Über das Wesen der menschlichen Freiheit* Reclam Stuttgart 1977.

Arthur Edward Waite, Lewis Spence, W.P.Swainson : *Three Famous Alchemists*. Rider & Co. London 1939.

J.K. : *The Prophecies of Paracelsus*. William Rider & Son Ltd. London. (出版年不詳)

パラケルスス 『奇蹟の医書 Volumen Paramirum』 大槻真一郎訳 工作舎 1980 年

パラケルスス 『自然の光』 J. ヤコビ編 大橋博訳 人文書院 1984 年

種村季弘 『パラケルススの世界』 青土社 1977 年

アレクサンドル・コイレ 『パラケルススとその周辺』 鶴岡賀雄訳 白馬書房 1987 年

C. G. ユング 『パラケルスス論』 榎木真吉訳 みすず書房 1992 年

チャールズ・ウェブスター 『パラケルススからニュートンへ』 神山義茂 平凡社 1999 年

- ヤーコブ・ベーム 『黎明（アウロラ）』 征矢野晃雄訳 牧神社 1976年
南原実 『ヤーコブ ベーム 開けゆく次元』 牧神社 1976年
『ベーム小論集』 園田坦 他訳「ドイツ神秘主義叢書9」所収 創文社 1994年
『フィヒテ シェリング』 岩崎武雄他訳「世界の名著 続9」所収 岩波書店 1974年
『シェリング著作集』 北澤恒人 他訳 燈影舎 2006年
山本清幸 『シェリング 自由論の哲学』 学術書出版会 1970年
ヴェンツラッフ＝エッゲベルト 『ドイツ神秘主義』 横山滋訳 国文社 1981年
速水敬二 『ルネッサンス期の哲学』 筑摩書房 1971年
A.G. ディーバス 『ルネッサンスの自然観 理性主義と神秘主義の相克』 伊藤俊太郎 他
訳 サイエンス社 1996年
エルンスト・ブロッホ 『ルネッサンスの哲学』 吉田千家 他訳 白水社 2005年